

バケモノは路地裏で助
言を

ティファナ・フェアガンゲンハイト

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

バスの転落事故で命を落とした少女は、不思議な力を持つて転生する。

十三の命を宿す少女は路地裏を支配していた。

ある日ルパンと名乗る者に出会った事で物語の歯車が、世界の歯車が回り始めるのだった……

なろうでも投稿

目次

プロローグ

1

路地裏

9

プロローグ

私が死んだ原因は、普通に事故死だった。

乗っていたバスが橋から転落。

即死だったらしい。

これと言って良い思いでも無い、楽しくもない人生だった。

もしかしたら死んだ後、『神様』という者に会ったかもしれないけど、生まれ変わった先に興味が無かったから覚えもない。

此処は真っ白な空間もしくは世界。

私以外に生き物が13匹いた。

ただ、私をじっと見つめていて、話し掛けてくることはない。

そもそも、言葉が分かるかも分からない。

少し時間が経って、私が眠くてウトウトしていると一匹の猫が近寄ってきた。

その猫は悲しげな目をしていた。

猫の尻尾で手招きをしていたので、猫に付いていった。

少し進むと明るくなってきたが、進むにつれて眠気が増してきて、歩くのも儘ならなくなってきた。

私はいつの間にか寝てしまったようだ…。

◇

目が覚めたら赤子になっていた。

そこは危険な者から守られた部屋ではなかった。

私は赤子の状態で段ボール箱に居る。

捨てられたのだと直ぐに分かったが、何故捨てられたのだろうか？

捨てられた理由は簡単だった。

私が寝が入りをうつと尻尾が現れた。

尻尾は私の意思で動かせる。

多分だが、これは猫の尻尾である。

捨てられた理由は『バケモノ』と言って捨てたのだろう。

次に私は立ち上がろうとした。

これは簡単だった。

また、歩くことも出来た。現在居る場所は路地裏だと思う。

ひとけ 人気は無く、目で確認出来るのは鼠位だった。

鼠は私を怖れるような目で見ていた。

そりゃあ人間の赤子が一人で歩き、ちゃんとした言語を喋っているのだから怖れるのは確かだ。

鼠はそれ以上近寄っては来なかった。

私の性別は女みたいだ。

前世と同じだったので嬉しかった。



それから、10年経った。

だから10才なのだけど、見た目は6才程の少女にしか見えない。

というか、見た目が6才から変わっていない。

髪は黒髪。

目は黒だが、少し赤黒く見える。

私は「キメラ」という種族？らしい。

幾つかの生き物を合わせ持つ動物。

私がこの私になる前に居たあの白い空間で見た13匹に成れるようで、他の動物になることは出来ない。

普段は猫か鼠、人の姿でいることが多い。

また、一部を除いたすべての動物の言葉が分かる。

一部とは人間の言葉だ。

人間の言葉は国によって違うから、私の知っている国の言葉は「前世の言語日本語」と「今居る国の言葉」だけ。

今居る国が何処なのか分からない。

だけど、町の風景からヨーロッパじゃないかと思ってる。

今居る時代もオカシイ事に最近気付いた。

前世の時代から考えると数百年前じゃないかと思う。

100年前なのか、200年前なのか、それ以上なのか…。

未だに分かっていない。



私は今、屋敷の庭のような所を歩いている。

何故そんな所に居るのかというと、捨て子だった私を拾ってくれた人がいたからだ。

その人の名前は「アルセーヌ・ルパン」と言うらしい。

有名なのかは知らないが、こんなの屋敷を持つているのだから、金持ちなのだろう。

私のような少女を、年齢も名前も聞かずに拾ってくるなんて変態だと思ってしまう。

だけど、普通に私に接してくれるし、服も名前もくれた。

私の名前は「テユクラス・メヘユイリス・フェルクイストウ・リハイテウ」。

長すぎるので『テウ』と呼ばれている。

何故、こんなに名前が長いのかよく知らない。

普段、私は裸足で移動している。

アルセーヌに心配されるけど、私はこの方が歩きやすいし、大地の力も感じやすくて

良い思っている。

アルセーヌは家を開ける事が多い。
普段、何処で何をしているのか知らないし知る必要も特にない。



アルセーヌがずっと寝たまま動かない事が多くなつた。

他の人が良く部屋に出入りをしている。

ある日の夜、アルセーヌが話し掛けてきた。

「まだ話していないことがあつたな。

儂は泥棒なのじゃ。

そして儂にはまだ幼い孫がいる。テウよ、孫に助言をしてはくれぬか」

「……助言？」

「そうじゃ。お主は普通とは違う、その違うことは他に役立つだろう……」

「……うん」

「……………」

そう言ううとスースーと寝息をたて、寝てしまった。

朝、目が覚めると屋敷は騒がしかった。

アルセーヌは心臓の病気だった、と言われた。

私にとある男はこれからどうするのか聞かれた。

私は居座っていた身なので出ていくと言うと、「そうか、アルセーヌ殿は『テウ様に会えたことでここまで生きることが出来た』と仰っております。テウ様ありがとうございます」と言ってくれた。



それから何十年間経っていた。

此処はとある路地裏。

私が生まれて初めて見た路地裏とは違うが、私はこんな所が好きだ。

何だか、大通りの方が騒がしい。

パトカーの音も聞こえる。

近くに居た鼠に聞くと、誰かを追いかけているらしい。

「、――！」

「？」

!?

誰か来る。

とりあえず猫に成つとく。

誰が来るのか知らないが、何だか面白そうだ。

ひとまず、盗み聞きをしてよう。

路地裏

誰か来る。

「やつと、とつつあんから逃げれたな次元」

「だが、また追いかけている来るぞ」

誰だろうか。

此処等じゃ見ない顔だ。

「そんなことはわーかってるさ。さーて、どうしたものかな。こんな路地裏じゃ逃げ切れるかどーか」

逃げてる？

じゃあ、さっきのパトカーは、コイツらを追っかけてたって事か。

「ここが何処なのか知らなきや事がなせねえ」

「……………」

？

一瞬だけど此方を見たような…。

もしかして、私に気付いた？

「どうした？」

「……………その暗闇に居るのはだれだあ？」

やっぱり気付かれてた。

どうしよう、この姿で出ていこうか。

それとも、逃げた方がマシ？

「急にどうしたんだルパン。そんな方、向いたって何も無いじゃねえか」

え？

ルパン？

アルセーヌ？

いや、そんな事は絶対ない。

私はこの目で亡くなった姿を見たんだ。

じゃあ、あれはあのルパンって事か。

ちよつとだけこの姿（猫）で話し掛けてみようかな。

「ありや？ただの気のせいだ『私の事かい？』った……………!!？」

「お…おお、おい、ルルルルル、ルパン。今、ねねね猫が喋らなかつたかあ？」

「そ、そそそそそうだな次元」

焦ってる焦ってる。

そつちの男は次元って言うのか。

『何、喋っちゃダメ?』

「喋ってる……」

なんだろう、面白いな。

嵌まつちやいそう。

「お前は何者だあ?裏で誰が喋ってるようにや聞こえない」

『ふーん、ルパンって言うんだ。そうだ、此処から逃がしてあげようか?』

「悪くない案だが、質問に答えてくれなきゃその案には乗れねえな」

「おい、ルパン!」

「いいんだよ次元」

『∴私はバケモノ。闇にひっそりと潜むバケモノだよ』

そう、私はバケモノ。

ヒトだけど人ではないモノ。

ひっそりと闇に潜み、姿を変え続けるモノ∴。

「そうか、バケモノか。面白いその案に乗った!」

「いいのかよルパン、そいつ怪し過ぎるぞ」

「良いっていったら良いんだよ。で、どうやって逃がしてくれるんだ？」

「どうやってか……、まあ勿論こんな感じ。」

私は姿を虎に変える。

『私の上に乗ればいい、それだけ』

『白虎お!? さつきは猫で次は虎……』

「やっぱり面白いじゃねえか次元！ 乗ればいいんだな」

「大丈夫か？ 重くないか？」

私の背中辺りに乗ってきた。

乗られるのは初めてだけど、あまり重くなかった。

『平気、大丈夫』

『ちよつと跳ばすからちやんと捕まってるね』



「何処なんだあ？ まるで廃墟じゃねえか」

目の前に居るのは黒い服に黒い帽子、煙草をくわえた男だけ。

もう一人はどっか行つた。

『此処は、あの町の外れにある廃墟だよ。そういえば、相方は？』

「あー、ルパンか。ルパンはたぶんこの屋敷の中を見て回つてるさ。

で、お前さん名前は？」

やっぱりルパンつて言つてる。

『私はテウ』

「それだけかあ？」

『名前長いから……テウ』

「そうか分かつた。そんでテウは何者なんだ？」

『……キメラ』

「キメラ？」

『幾つかの生き物の塊。さっきの虎も全て私。後、これでも人間だよ』

私はそう言いながら黒目黒髪の姿に変える。

「…成る程な、ルパンが興味湧くわけだ。

言つてなかつたが、俺は次元。相方が『ルパンでしょ』…そうだ、ルパンだよ」

「何々、何の話してるのさー。あれえ、この嬢ちゃんは誰？」

あ、やつと戻つてきた。

「ルパンか。こいつは、さっきの猫だった者だ。名はテウつていうらしいぞ」
自己紹介が省けた。

「ふーん、テウか。よろしくなテウ」

『……………』

「そいやアルパン、何処行つてたんだ？」

「いやー次元、この屋敷に来るの久し振り過ぎて、思い出すまで見て回つてた訳よ」
やっぱりそうなんだ。

「久し振り？ 此処に来たことあんのカルパン」

「ああ、ここ『此処はアルサーヌ・ルパンの屋敷の一つ』……次元、俺について何か話したか？」

(ニヤニヤ)

やっぱり孫か。

ふふふ、楽しみだな。

「いや、まだ何も」

『いやいや、久し振りだねアルサーヌ・ルパンの孫。』

あんなにチンチクリンだったガキっ小僧が、こんなに大きく成つてるとは驚きだよ』

「あ？ テウつて言ったな。お前、本当に何者だあ？」

次元は隠し持っていた銃を私に向けてる。

『私はテュクラス・メヘユイリス・フェルクイストウ・リハイテウ。

アルサーヌの古き友にして、路地裏の助言者。

ああ、奇跡を起こすモノって言われてたっけ』

「……………」

カッコ良く言ってみたけど……………って、あれ？表情が固まってる!?

「おい、ルパンどうした?」



あのままルパンは倒れてしまった。

貧血とかそんなんじゃないやなくて。

ただ単に驚いて「ドサツ」だった。

今は適当な部屋に寝かしている。

次元はと言うと屋敷の中を見て回っている。

私の姿を見て驚かなかつたな、ルパン。
でも、何で名前で驚いたんだ？
まあ、いいや。